萩すゝき和歌

霞亭藏書

中野旧蔵

なか月はつかころの　姫君の御里へまう
でし小林といふ一もといとさまよき
木ありしをこれなんよそのめでし
ちゝはゝさるほしくおもひけしの他
にほひさみまゐらせけるをや又森に
しくおぼしくらんそのよういへ　それ
かけてたつさころはいのさくるにや
あれからはかりゆかしきを見まほしさ
せられいはすしものまとあはれのいへ
もみえしことは林とはかく　たれか

知足文庫

うたゝねへくともおもひつゝまだにてましかを
なりさもまいらせたまひ葉くまさ一
なるきたろめしこうきうそくさみくられ
しくこやゝみそゝうつりしつるは見も
みやるかなほかうをさへれふてしてあは
なりしこうゝすにあまろゆくありかく
くみれにこしとおろまゝもたれはゆき
とりはれなくさふみてやとはさるに
こまのえはすまてなりしみはれかう
ひかれへこもおもひくこなあはれ

こともなくてまりくさつきみ
きこふことにあはれ
御
とれとてやゝかし宮へさしはふはり
さこいつる萩のいろもめはれし
おかへし
あはれむ君のなくて露をはらへ
さよいつる萩のもとにやどりえこみ
極さみしめりしなにはりともおもひ
い

かれさく萩乃葉のうへにもとも
つへし
うくきあしあらしとおもふとめえに
なれ色うひゝの萩の枝 光信
いろ秋乃さつへさえうしきたしま錦
いろはふくかろえなる乃萩のえ
つへし
いくあさきともかもよこむはむ宿の
庭まうへこく萩乃ひともとも

秋つしなほのさ野よて萩えの 為
いろもえなうほさにうよからの宋
つし
旅人のこゝの花乃露なつ
色を物くめなる庭のえにえ 思寿
葉もたなかろし色あらしうへとれて
さりをみなれ庭乃秋萩
うへし

花のころうへしわたしをむかひこす
ちるをもかくや霞む林

浅尾

梅をたつ庭の林にいくあれを
みよとやさける花のひともと

うへし

はなたちむかこのひと葉をあねとしみ
いく世さかへむ庭の花のあさ霧

うつろひやまちえし花の霧のえよ

松田

なれいく梅の色をにほふらん

うへし

むかしたちえの花衣子とめ秋
あかぬこゝろよいくよまかれん

花井

字はうへし人のさかへやさかえし
花よりも花の庭の秋うえ

うへし

字にしうへし林のさかへにあさへに
人あかれとも秋をてことなり

宇はらへあかすみなにのやま
にゆふこうけんなるのたえ
えし
さはしまもかたにこゑれ人ての
こゑんのつまめ鹿の一とし

あくひかや庭のくたねされ初く
秋とこせさんけるの一たな
えし

なとの茶め咲出しよりくさか枝上
なれいくりよれ旅をおもひつく

朝なゆふな露も色そふ萩かえの
ことのもふかしなかしやらん
そし

あまた夕ねなたふ家たてのえの
まねかしもみれ萩のさかりよ

梅し桜し心にくしもいつ

いかはかりかれし庭の妹らに
世し
宮うつし植しにくしもへてらん
千ふさたりむら萩の露ともと
さく花に枝はらにほひこの宿よ
はうなしいろなの庭の萩の枝
伊与
世し
おりかしにいろはみをめる萩の花の
花よいくよの枝をもたらん

庭の面にうへをく萩のさかみる秋
元
こかれくかはつかれ志り女乃
うへし
おもく志露よんともふれや
風もみさるを庭の萩の枝
元
はやとめはのふりあるにも世の妹
いろみもんまてさけりる萩の花の
うへし

このやよめさうへゆくまゝ小萩枝も
折さしたらへよ花乃萩の枝
かゝはなりまして秋人をはつの夕れんやかて
まにさしみやあけむは萩を移して
よめのせてみをふ田へうつ花とへまも
これ又花のめいかくあれんおかしく
ありし給つと也

宇は植て秋まつみるやは花も　　百里

庭よきことある萩の色としに　　廣長
咲よ為こたむきたの萩の大かな
めつらんろをやすへきむ

花よはく小萩かうへよまて飛んて　　正満
やしなひさかしうわふうきた

前をまたこそたれ風をまちやへ　　倚澄中
めてぬる人のさくわたかそ

元忠
うゑみてもあはれはかゝる萩のうへの
きりうちやさきぬ花もちりかゝし

貞成
はなさくは萩もおよはし枯えに
むしもなく萩のもとあらのにはを

政光
みる人のこゝろの花をのこして
花もよはしし庭の枯なに

三久
植えみはん人の多めとやさらぬとく
なそもはちらん庭乃枯なに

保永
守へくみなん人もはころとおもひやり
色も姓しき庭の枯なに

秋慈門
色もなきわかてるのなも枯なにの
なをなにさつる什をあしといまし

信英卿
花のいろも粒やしくまうれてむ

千世の始しきたる宿の秋くに　俊直

宇つしうへをみりへき宿のちよ数
しけりやをけら萩乃上露　信行

様しいかなる法者秋にまけ
うつりつる色や萩の初花　直卿

やとなる庭のつるはにうよそにさく
うれしきへにほ花乃秋くれ

植へこしはいく世をこおもよいめや
これむらさきれん庭乃秋くれ　元菴

いく千代のたれか植しつらん
いろをよふら庭の萩の花　正淳

いけくまいこしてうへしゆかりとて
かくいろこきはの秋くさ　定富

玄長

極くみらんのちらるよるしいふや
いわをあさかりぬ秋くれの花
景寛

そらしいなやはんらぎたちのくの
秋風もここに入やさぬく萩
其年

身になひさけゆし色をひにめ江の
さりえおりぬ庭の秋くれ
流謙

うへをおてかつすやこれも志乃君と

かつん宿のあさくれの秋
信指斤

えおりすよ花のいを萩ちらおを
作りぬく出しよふやのれも
元敬

くもりおれ出秋はすめら帰かな
まつさの露しほせる秋きさ
瀧川氏女
世め

ちり家に枝ならておん秋萩の
ゆらめのいさうとゆりしかな

ゆふころはいかにこゝろくみてこの二雛
みなさしくまいりけれたゞなのよみく
をかれけるとぞ
字まくあはさそるかみの家なる
いつきのとしの枯萩乃文化　露
かへし
とちのきたに小萩かうへの露にしも
うくはかなみの身にあまりとは
萩のやさしにすこ一もときうへよし
人ありやかはそはやてあろ人たり

このみはなりのよみくをらせられけるの
下の集
此六月のころみさとの前栽をみは
庭小萩藤のうちはしきを好かりしを
植くるてみつからへありけふつらせ
はきくいへしうあつきはなりとこの
はすこきてぬるんさりすき会
おちきよいんきみたちやとらへく
人すやなんとさいへとやりを
まうけたりてきての杉りさう

かくまりなく伝こしてうつそかなり
萩を宮城野の名物すさのうぬ
すなはちむさしのかくまをかぬやう
露なかうつさにまへて乃かへ花なれ
ふかみえうしをやかくうしこにとこれえ
くられしとおすひおこせ打かぬし
名立ちてわしてまひ打そきや
林よりのまては前をはよへをなは
やりへし萩の花のさきてうか人めに
はらへし人もなこうのにえみよきれ

世苑のぬしはほふ出君へくまかしとん
うらうへけ於花ふうちふわに自
安とんてよまに萩をすきさをかり
つきて当世の林のかりてあれさ
人ひさしきと人にてまかく守
よましむへしと申ゆをはさのめの
くせよんさしすれく紅梅やきさせり
ことんなつくたつを行く人をくおこ申し
うつし植しおりぬるへしとさく萩の
たなのかしきしきてめぬてなさ

いくそ世の秋のさかへむこらやさゝめく
まかきの小萩かのするに
伊出し庭のすゝきの穂をまねく
あはれとよしやさらばとふく
人をふまれく尾花の袖をは
あはれしとねまちわびこそつま
也しをへてさかへほにかて花すゝき
かたむすん秋のすゑも見えぬかな
かくあけのをらちをたつくてこれよ
むくろそのてしし

おほしの南のみなりに今日のころ
一ととニとと萩なくをうへ給ひしつるを
をはくえらのかはきよとをすまは
出わたらんよみえけの紙をくやしあい
かくゆきしに秋姫の面をきり
あらはくえもちの紙わつきことよ
うむよ秋のこゝろまて此二々きの花咲
植出なんわつ紙のそむひて映
みれたまてもや瑶しにやすく葉月
もみつはこゝゆくころのうちに枝よ

一　てうさいなしつゝハ露かゝて月ともハ袖
ぬれぬるとめつらしとようにも志
らんもん二首を志るへのことく小花
なりてのしやうえを絡しつゝへとく
咲してへしとハ小まゐにとなり
ますうふ多くにハやみかくて多ん
えへし　萩乃ねし
うはらへし秋をやねすへ秋のんまとく
さた出乃萩のもなかの一もとく
いく秋のさゝへとさみもらやたぬ

もとあらの小萩ちりたに守つしく
萩のねし
こゝのちぬ露かさうへよ秋乃さて
なかくすさのあるをまうたよ
志るし庭ほまねくおはなの袖かや
なふなしいしをねすゑはこう
花さくさうへよにかていうふなか
人乃ちうちかうふまくする

又あれはるよ利

むらさきの花色衣こきうすみよにも
さるゝ小萩のもとのゆかしき
返し
紫の花色ころもこきうすみ心に
をとらんものゝこゝろこと乃葉
御里乃みるもみるく萩乃四段しるかりしハ
さりつしましをさへ云ふへく四方に
いわけなるさまなれ
我哉かさみのかるにてよまいらん人みな月
乃このわかくこゝあまし庭乃萩やく

せうし紙みかのうらしかりけれは
まう物たまはりしをふくやて姫君
乃おまへにて庭をうつしゑにて枕紙
またかきのもうらにはゑをつさりあるく
花さかほよわらひとひとみえて人物
見てはつましらは四方よみまいらせて
をもてさやおしもとん云ふかとみはし
ほとふ秋もみうらすてかくてをよかた
こはくきゆ姫

宇治し極しやうふをたゝれ子とは秋
花さく萩のとれもあつはてく
たとのもほさくてもその秋萩の
くるなをされつゝみかこゝらしや
はれせしあてやつ梅に詞たちへふか
しさもおもふとかひなくこゝろかゝると
うちふまふにほてこわさへとは宝
なり給
たえめての　あれとなりぬて　こゝろみくの
あらんみれ家を　をなうへあ　あら久宝も

みなやせし　君らみなもとに　おもひ出る
ふきれしもと　このやとふ　うつし極て
おりくの　凡のあはれも　いとふかく
朝なゆなゝふ　袖をしほ　おもひなるそ
おもひすりて　とれとまかせて　秋なるや
あひなれゆく　おりぬえく　花のゆく
今もきこう　みかとらく　さるや夜の
花はみつきよ　あふこの文　これ恋しと
あかるくの　たかゆふみて　ゆかめのむ
君ことその　花をさへ　うたへあらく

うきのこの
おもふなさしと
よくの場の
おほきよ花の
色をふかき

みんころの
さなるへみ
たよりとさに
こゝろえて
みなかわきしる

あきもれを
かくと告やる
あさかりぬ
いろいろ草の
筆につき
古人

追加

蓮阿

宮はしらへゝみやに森乃花のうへ
風まけ露もちらさなやらく
うへし
乃ねをまけ露もちらさそくは秋
こゝろやとも森の道乃えぬらぬ

おましらに庭上萩はらへ分わの
娘て三人乃ほかしきうかて婢人行乃花
されむむ枝をまいこまふてみな月の
すゑ日ミハ水うちそそきあそ
まれハそのかくへとすなこもちゐ
ろへ分をのれとこのぬしとよりあらん
こと侍らハいかにいふあれ出え〻ま
ひとつよりハ字さへ分ふりて一婢あい
ゆきへおけ程ありけるもいと了為
乃あいかくよろおわしゑへろうまかん

よろつ代の秋をかさねしむすひき
なかいつまてに色そことなん
かはしきえゆける
千との秋のもといはゝこのやとを
かしすゝむと君かいへりや此
ゆかしかりの人にめてしく千よみるを
かれけるこふ文をこふやうくて
もしりくふこふへし
いく秋のやふ日影をしき　季房
かへてをるかを人のなきへを

うへし
宮へしかてまほしくハ秋こそ
なれいく秋のやとをなかれん　房
かへにたしまたれの露つきぬ秋
はこし秋をきくへ後のへよ
うへし
ちゝ秋をきくとよろこひ極たれ
かすめのをしきをみとせきを　田房

やさしさよ一もと薄かにほふらく
いく叢みまくほしくすゝきを

返し

露しくをばなかりかく薄
うゑふて人のこゝろくねるは

清虎

一もとゝいへし尾花のいく秋を
かれしものと宿にまねくよ

返し

人まつのなれをさとりまでり
いくよまさへむやまのとすれ

宗舟

花すゝきほのめく秋風に
ふるさとみくふなくいくなむもとの

返し

秋風の吹しくるふしまわ尾花かな
人のたもとにかよふなるらむ

政舟

うつし植て幾秋までも此宿の
こゝみさらへ咲尾花はくかゝるを

せし
梅しらへし一村すゝきかりかねよ
こゝみつはらへやとしたるらん　里乎
一とせよりはまよりよかひあつ初尾花
にゆるなは宿ぬ秋をしらて
なし
思ひおもねにゆふのなき人秋もすひ　宗て
手とりぬ秋のさのへとろまり
かの荻の如とよう

ひと清紫農之にもみぢ秋色
寄世乃秋もとまる一こそ見ぬ
述し
こゝのえぬつこゝ里へわたし秋すゝき
吹よろ旅よ女ちるうへ見よ
かゝのこゝさりとく寿よみそとら　連阿
なし
くまへし君の人所てのはすき
かたいけの秋のさへぬさつかせ
らへし

糸萬ゆへしるを君なさん
いやしろえみ佗へ世く種
こゝろ師うらはうてよろ歸りしく
つゝくる哥
ちよ祢こゝめ人のことはの花すゝよ
よろいやよろんくさの末もとふ
ゝゝし
宇おしさ毛神みろ峯にたちき
ち祢く小よ利し人のこゝろ葉
西■

ちよのえ秋津のみちもまもる秋
こゝにさへなんむすのあまうれ
康武
明うるに務ともはこゝいとあこゝ
霧のむかく雲外夕那もて
信尚中
種あみし人なくはいはまきさ
松のもとも妹ならくりやまつらん
元忠
花もなほ色しるゝれしゝこの人此

さらぬたにてれ月ねくるゝは
月なへ人ゝうらさはあらされに
風のすゝきのたよりをも
源永
露むすふ萩野冬ないとすゝき
なをとゝへてらんうへし月かけ
秋慈
ちれて身極にかかに出ゝれさて
くさの葉もやとつゆいかならぬ
信直
はな薄ゆくかすかなる
くつらへしやとのけさ
有弥
あはれ秋の柳のすゝきのかも
ますむの花の月まつかな
定富
元教
たまはちりまへいとひて花
なかくれ露しあつてここら
源川氏女
廿六

ひとくさの花にもいくらかに出て
うつりかはる雨のさまは
をんなるさへもよろし
実秋をさふまつの花すこさ
かに出ろへよやよのたまに
字へをかし一もとすこしかきりなき
梅のこゝろをはやいろん
たのへし
いろ枝を君のみさをの為すに
よろにはるへそのかりあるまた

きりの名に秋と野の母植さし
一もとあはこ根をも出るん
色よみよりく行のにもかくふ袮のを
名作
こゝろむくをおもひつふかきいふよ成
一もをすれのさすろんむ
清くへし
こゝのふものをおもいぬ哥の
めくに母嫁かん末のまてこと

角屏帰去来

霞起藏書